The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小泉進名誉教授に聞く : 大阪大学の思い出
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2010, 60(3), p. 58-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51031
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【資料】

小泉進[†]名誉教授に聞く

― 大阪大学の思い出 ―

菅　　真 城[‡]・阿 部 武 司[‡‡]

2009 年 3 月 17 日
於:大阪大学文法経本館小会議室（大阪府豊中市）

大阪大学法経学部へ入学

阿部　本日は経済学部で長らく教鞭をとられました小泉進名誉教授のインタビューをさせていただきます。

小泉先生は，1949（昭和 24）年に大阪大学に入学されて，1953 年 3 月に法経学部経済学科を卒業されています。ご入学時は法経学部ではなくて，法文学部ですね。

小泉　法文学部なんですね。最初は法文学部です。卒業のときは法経学部になっていて，さらにそのあと経済学部になっています。ややこしいので，これからの話では，一本化して「経済学部」としますが，時期によって適当に読み替えて下さい（1948 年 9 月法文学部（法学科，文学科，経済学科）設置。1949 年 5 月文学部と法経学部に分離。1953 年 8 月法学部と経済学部に分離）。

阿部　1948 年 9 月に新設されて間もない阪大法文学部に進学された理由についてお聞かせください。また，当時の入学試験はどのようなものだったのでしょうか。

小泉　実は私は，終戦後に満州から引き揚げてきました。父親が 4 年半シベリアに抑留されていたもので，灘中と新制の灘高を出てはいるのですが，ほとんど肉体労働をしながら通ったということで，あまり勉強をせずに受験をしています。

まだ父親が抑留されていたので，経済的なことを考えて，大学に進むのなら経済学部だと思っていたところ，ちょうど新聞紙上に大阪大学に経済学系の学部が新設されるという記事がございまして，新しい学部なら非常に元気な学部だろうと，新しい気概を持った学部だろうと，そういうことで阪大の経済学部を受験したのです。

最初の試験ですから，試験の期日はだいぶ遅かったと思います（入学試験は 6 月 8・9 日）。正確に何月だったかまでは覚えていないのですが，だいたい入学式が初夏だったんですね（入学式は 6 月 28 日，開講は 9 月 1 日）。そして入学式の日に，中山池で泳いだんですよ。当時，中山池の向こう側の丘の上には進駐軍の宿舎がありまして，私は泳いだ後で，進駐軍の宿舎の下水が全部あの池に流れ込んでいるというのを聞かされまして，非常に驚いた記憶があります（笑）。

そういうふうに入試は遅かったですが，入学試験の問題がどうだったかといえば，その他の大学と特に変わることはなかったと思います。

---

† 大阪大学名誉教授，帝塚山大学名誉教授
‡ 大阪大学文書館設置準備室講師
‡‡ 大阪大学大学院経済学研究科教授

印象に残っている先生方

阿部　入学された経済学科で印象に残っている先生方についてお話し下さい。

小泉　印象に残っている先生は多数おられますが，個々の先生方の印象というよりも，その当時の教養部の雰囲気，そして経済学部の雰囲気のなかで，私が印象深く存じ上げた先生方の話をさせていただくのがよいかと思います。

まず教養部について申しますと，発足当時，教養部は北校と南校に分かれていまして，私は北校でした。北校の先生方は，浪高（旧制浪速高等学校）の先生だった方が多く，旧制高等学校の先生方が教養部という初めての組織のなかで教育を始められたということで，私はそれなりの深い印象を受けました。

そして，経済学部の方をみますと，この年は経済学を含む文系の学部が阪大で始めて設立された年で，そのなかの経済学部は，アダム・スミス，アルフレッド・マーシャル，アーサー・セシル・ピグーといった経済学の流れを汲む欧米のオーソドックスな経済学，これをわが国では近代経済学と呼んだのですが，この近代経済学に基礎を置くという旗幟を鮮明にして創られた経済学部でした。そして阪大はそのような旗印を鮮明にした経済学部が創られた最初の大学だったのです。

それまでのことを少し振り返ってみますと，戦中，例えば東大をみますと，大内兵衛さんなどマルクス系の方が放り出されて，難波田春夫さんなど，ゴットル経済学といった国粋主義的経済学の方が力を持っておられ，そして，舞出長五郎さんや河合栄治郎さんなど，オーソドックス経済学を研究しておられた方たちはおとなしくしておられた。

そういう状況で終戦になって，今度は難波田春夫さんなんかが放り出されて，大内さんなどが戻ってこられて，マルクス経済学者の力が強くなった。これは東大だけでなく，日本の経済学部全体で起こっていたんですね。ですから，われわれが近代経済学と呼んでいる分野で研究をしている人は，マルクス経済学者の強い影響力のもとでしか研究ができないような状態だったのです。

そして，そういう状態は望ましくないということで，阪大に，白紙に絵を描くように，新しい経済学部を創ろうということになったのです。そうしてできた経済学部ですから，新しいだけではなくて，近代経済学に基礎を置くという旗幟を鮮明にして設立された学部だったのですから，経済学部は独特のはっきりした学問的雰囲気を持っていたのです。

それともう一つの雰囲気は，それまでの日本の経済学は，外国の経済学を吸収するだけ，輸入するだけの経済学だったが，輸入するだけの学問でなく，これからは日本が研究して，それを世界に発信する，そういう研究活動をしようではないかという気概を持った研究者が集まっておられて，その方々がつくり出される活気にあふれた雰囲気がありました。

それから，第3番目ですが，これは私どもの研究分野の話ですが，その頃は，欧米の経済学部のなかで新しい波が出てきた時期でした。1930年代の大不況があって，そこに「ケインズ経済学」が現れてきまして，戦中から戦後にかけて，アメリカで「ケインズ革命」と呼ばれるような経済学の大変革があったのです。それがちょうど阪大に経済学部が創られた時期とシンクロナイズしていまして，阪大の経済学部に集まられた近代経済学者の方々は，新しく盛んになってきたケインズ経済学の研究に，まさにわーっという感じで取り組まれていたのです。

そんなふうに，いろんな意味で大きな変革の動きが出ているときに，私は阪大の経済学部に入り，経済学の勉強をさせてもらったのです。ですから，そういう雰囲気のなかで接した先生方には，非常に印象深い方々がおられます。

教養部の話に戻りますと，私は戦中に中学校

教育を受けて，そのころは敵国語ということで英語の教育はしてもらえなかった。だから語学教育が非常に弱いままで大学に入って，教養部で英語，ドイツ語の教育を受けたんです。そのために，私にとっては非常に有益な教育を与えてもらったと思っています。

このごろは語学教育というと，時事英語であるとか，スポークン・イングリッシュとか，そういうことを盛んに言いますけれども，私が勉強をした英語，ドイツ語というのは，そんなものではありません。『チャールズ・ラムの短編集』とか，ドイツ語だったら『ゲーテの世界文学の理念』とか，『ニーベルンゲンの歌』とか，そういうもので教養の勉強をしたために，私は異文化というのを本当に理解することができるような教育を受けたと思っています。

そのときの先生には，ドイツ語では潮崎（俊一）先生とか高尾（国男）先生，英語では佐谷（正）先生なんかがおられたんですが，非常にいい教育をしてもらったと思っています。

それで本題というか，経済学部の話をしますと，経済学の本流と言いますか，欧米のオーソドックスな経済学の研究をずっとしてこられた方が，高田保馬先生なんですね。この先生の『経済学新講』などを読んだら，どれだけ勉強をしておられたのかびっくりするような方でしたが，そういう方が講義をしていた。

それから安井琢磨先生。これは兼任の教授でいらした方で，専任ではなかったのですが，この先生も東大の河合栄治郎先生の下で勉強をされて，ドイツのベーム・バベルクとか，いわゆる本流の経済学者の研究を緻密にしておられた方で，そういう方の原論の講義というのは素晴らしかったですね。

また特に印象深いのは若手の気鋭の学者の方々で，全員の名前はいちいち挙げることができませんけれども，財政学の木下和夫先生とか，国際経済学の渡辺太郎先生，理論経済学の森嶋通夫先生とか，この方は文化勲章の受賞者ですが，そういう若手の学者が，先ほど言いましたケインズ革命という波のなかで研究をして，そして輸入される学問だけではなく，自分たちが研究成果を挙げて，それを外国に発信しようとするかたちでずいぶん励んでおられた。そういう面では非常に強い影響を受けました。

そして阪大の機関誌がありますけれども，いまでも *Osaka Economic Papers* と言うんですかね。

阿部　英語名はそうだと思います（日本名は『大阪大学経済学』）。

小泉　そうですね。そのときに，私はいまでも覚えているのですが，木下先生や渡辺先生や森嶋先生などが集まって，*Oxford Economic Papers* に匹敵するような学術書をわれわれがつくろうということで，ずいぶん熱心になられまして，そしてできたのがいまの *Osaka Economic Papers* ですね。

ですから，そういう意味で非常に活気のある学部で，そういう先生方から，ケインズ革命という潮流のなかで経済学を勉強させてもらったというのは，私にとって非常に貴重な経験だったと思います。

木下先生だったら，ケインズ経済学に立脚した財政学をやっておられる。その当時，こんなことをやっておられた方は日本に誰もおられませんでした。読んだ本は，（アルヴィン・H・）ハンセンの *Fiscal Policy and Business Cycle* とか，渡辺先生だったら（ロイ・フォーブズ・）ハロッドの *International Economics* とか，森嶋先生だったら（ジョン・リチャード・）ヒックスの『景気循環論』とか，そういう勉強をどんどんさせてもらったんです。そういう意味では，非常に印象深い先生方に，素晴らしい教育を私は受けさせてもらったと思っております。

菅　まだ先生方もお若いし，学部も，学問も若いしという意味で，エネルギーにあふれたという。

小泉　そうなんですよ，本当に。「新しい酒は

新しい器に」という言葉がありますが，まさにそうなんです。新しい酒を新しい器に盛ったんですよね。そのころの阪大経済学の雰囲気というのは素晴らしかったですよ。

新制と旧制との関係

阿部　先生の学生時代には，新制と旧制の大学が併存していたと思います。新制の学生と旧制の学生とは，どういった関係でしたか。

小泉　あまり意識していたことはないんですよね。教養課程のときは，そういうお兄さん方にはお目にかからない。そして専門課程に入ったときに，お兄さん方がいはるなと，自分たちが初めて１期生で入ってきたけど，お兄さん方がいるんだなというのを意識した程度なんです。

そして演習に入っていきますと，やはりお兄さん方も一緒です。専門課程の講義でも一緒ですけれども，旧制，新制という意識がそんなにあるわけではなく，ちょっと先輩がいてはるなという感じで，仲良く一緒に遊びましたし，いまでも仲良くしている。卒業生でも仲がいい旧制の方は非常に多いですね。

阿部　演習の先生は高田先生でしたか。

小泉　私の演習は３年のときが木下先生で，４年のときが高田先生です。高田先生のときには森嶋先生が一緒に入っておられて，ですから高田先生と森嶋先生の薫陶を同時に受けていたと，そういうことでしたね。

阿部　当時は，３年，４年と先生を替えられたのでしょうか。

小泉　そうですね。いまでも替えることができるというふうにはなっているけれども，あまり移動しないようになっていると思います。しかし私どものころは，むしろ３年のときは若手の助教授の先生のところに行って勉強をして，そして続ける人もいたけれども，次にはちょっと怖い先生のところに行こうかというようなことだったかと思います。もちろん木下先生も，結構怖い先生ですけれども。

高田先生のところでの思い出としては，高田先生は終戦後，どういうわけか知らないけれども，公職追放という処分を受けられた。しかし，進駐軍のほうでよく調べてみると，そういういわれは全然ないということで，これは取り消しになったんです。取り消しというか，それは初めから間違っていたんだということで，最初から消してしまうという処置になって，高田先生は公職に帰ってこられたわけです。

そして演習の後のコンパの席上で，ある学生が高田先生に，「高田先生の公職追放の処分も解除になりまして」という発言をした。そのとき高田先生は，もう顔色を変えて怒られたんです。

先生は戦中，軍部に協力するなんてことは一切せずに，孜々として研究だけをしてこられた方なのですが，その方をどう間違えたのか知らないけれども，そういう処分にした。それは先生にとって，本当に許しがたいことだったと思うんです。ですから，解除になったというのと，初めからの取り消しというのでは，先生にとっては大きな違いで，それを混同したということに我慢ならなかったのです。べつに学生の人は悪気もなくて，それで怒られるのは気の毒なところですが，やはりそれぐらい，先生にとってはけしからんという思いがあったんだろうなと，そういうことを記憶しています。

学生生活の実態

阿部　当時の大学生の生活実態について伺いたいのですが，授業以外のサークル活動とかアルバイトは，どのようなものだったのでしょうか。

小泉　私は自分が典型的な学生だと思っていないんですよね。父親が４年半もシベリアに抑留されていて，経済的に恵まれない。そういう境遇にありましたから，みんなも同じような境遇にあったわけではなくて，きっと私は経済的に

は厳しい状況にあったほうだと思います。

ですから，私は家庭教師のアルバイトをして，高浜虚子のお孫さんをずっと教えていたのですが，夏休みなんかになったら肉体労働をするというような具合でした。もちろん日本育英会から奨学金をもらいましたけれども，それでも足りないから，そういうアルバイトをしました。ほかの人も同じだとは思いませんけれども，そんなに活発に遊んでいたという印象はないです。いまの学生さんのほうが，はるかに活発に遊んでいるのではないですか。遊ぶことは，そんなになかったと思うんですよね。

阿部　当時はまだ高度成長期の前でしたね。

小泉　その前です。朝鮮戦争による特需なんていうのはその後ですからね。

法経学部助手に就任

阿部　先生は新制第１期生として法経学部ご卒業後直ちに1953年４月に法経学部の助手に就任されていますが，助手ご就任のいきさつにつきまして伺いたく思います。また同期の方で新制の大学院進学者は，どの程度おられたのでしょうか。

小泉　私は，先ほども申しましたように，経済的に恵まれていなかったものですから，大学院に進学するなんていうことは初めから考えていなかったんです。それだけの経済力はないと思っていましたから。それで，そのころも就職難だったのですけれども，住友銀行に内定して，行くつもりでおりました。

ところが森嶋先生が，「おいおい，君，銀行なんか行ったって人生つまらんぞ。そんなところへ行かずに大学に残らへんか」と言ってくださったんです。そして，本当にもったいないことなんですけれども，私の父親のところまで来て，「息子さん，銀行ゆきをやめて大学に残したらどうですか」とまで言ってくださって，「大学院に行く経済力はないだろうから，助手にするようにしてやる」と言ってくださった。

ですから，いきなり助手なんですよ。これは高田保馬先生のところに行って頼んでくださったりしました。本当にもったいない話なんです。私の経歴を見ていると，なぜ，いきなり助手なのだということでびっくりされる方も多いかと思うのですが，そういういきさつがあります。

ちょうど同時期に大学院生として残った人がどれぐらいいるかというと，そう正確には記憶がありませんけれども，大した人数ではなかったと。たぶん５，６人ぐらいではなかったかと思います。それは歴史のほうも，経営のほうも含めてというふうに言えるかどうかと聞かれると，あまり自信がないんですね。周りのところで同じような大学院生の部屋にいる人しか見ていませんし，いろんな先生の演習なんかに出てこられる方の顔ぶれですから，そういうことを考えますと，もう少し多いかもしれませんけれども，周りにいるのは６名ぐらいだったような気がします。

ほかの先生方はどう言っておられますか。歴史のほうなんかは。

阿部　経済の先生でお話を伺うのは小泉先生が初めてでございますので。

小泉　なるほどね。作道（洋太郎）先生ぐらいでないと覚えておられないのかもしれないけど，もうほとんどおられませんからね。

阿部　その当時は少なかったのではないでしょうか。

小泉　少ないでしょうね。だけど安岡（重明）さんは残っていて。

阿部　安岡先生が残られたのは有名ですけども，ほかにはあまり伺っていません。

小泉　そうですね，だから安岡さんぐらいなのかな。

学部改組の影響

阿部　次に進ませていただきます。阪大の文科

系部局でございますが，1948年9月に旧制の法文学部ができまして，これが翌年の1949年5月に文学部と法経学部とに分かれ，さらに法経学部が1953年8月に法学部と経済学部に分かれます。こうした改組の影響はいかがなものだったのでしょうか。

小泉　自分の志望をあまり明確にしないで入学した方にとっては影響があるかとも思うのですが，私は父親が法律屋なので近くで法律の勉強を見ていて，これを一生の仕事にしたくはないと思っていたから，あまり法のほうに行く気はなかったし，もちろん文学部はお金になりませんから対象外。初めから経済に絞っていますので，法文学部に入るときも経済だと，法経学部になっても経済だということで，自分の進路を選択するうえで私にとってはあまり影響はないんですね。

ただ，法文学部とか法経学部というふうに，ほかの学部と一緒になっているような所帯のなかにいますと，お隣さんの学問というのは，わりあい近づきやすいような感じは持っていました。私は経済学部の講義だけを聞いていて，面白くないわけではないけれども，あまり楽しむというようなものではないから，フランス文学の講義を聴講に行ったりしました。そのころは，京大の先生ですけれども，伊吹武彦さんというフランス文学の人が講義に来ておられたので，聴きに行ったりして，結構，楽しんだこともあります。

それから私たちの時代は，法学の講義は単位としてずいぶんたくさん取りました。きっといまの経済学部の学生よりも，私はたくさん法学の単位を取っているのではないかと思いますけれども，もしかしたら，これは法経学部なんていうところに在籍をしたおまけかなというふうには思っています。

阿部　いまのお話と関係するのですが，創立当時の経済学科について，先生方に関しては先ほど伺いましたけれども，そのほか何かご記憶に残っていることはございますか。

小泉　それは先に申し上げたように，阪大の経済学部というのは，近代経済学を基礎とするという旗幟を鮮明に立ち上げました。それから，ちょうどケインズ革命の時期に乗っかっていました。また若手の先生方が，輸入をする学問ではなしに，むしろ輸出をする学問にしようという意気込みを持っておられた。そういうことこそが，そのころの経済学部について私が思っていることで，先生方の印象のところで申し上げましたように，その雰囲気のなかでの先生方の印象なんですね。

菅　建物とかは，たぶん浪高の尋常科の建物ではなかったのではないでしょうか。

小泉　そのことを申し上げないといけませんね。あとで私は長期計画委員会の委員長をしたりしますので，それとも頭のなかでは重ね合ってくるのですが，そのころの日本の大学のなかでも，特に劣悪な環境のなかで勉強をしたのではないかと思います。石橋の駅から歩いていく道は，もうどろどろなんです。待兼山，中山池の横の道なんて，革靴を履いてきたら革靴が泥だらけになるような，舗装されていない道なんですね。

そして校舎自体が木造校舎で，その跡にこの建物がたっているんでしょう。それから，浪高庭園のあたりにも，ひどい木造校舎があったんでしょう。私が高校のときに行っていた灘高の校舎なんかは，きちんとした，それなりに立派な校舎でしたが，大学に入ってきて勉強した校舎というのは，ひどいものだった。

菅　勉強をされるうえで，経済の専門図書とかはそろわれていたんでしょうか。

小泉　学生時代に，あまり大学の図書館を利用するというような状況ではなかったですね。自分でほかの図書館に行って借りて読むようなことが多かったです。それから先生から借りるとかね。

いまでもそうですが，大学の図書館というよ

りも，経済学部の資料室に重要な図書がたくさん詰まっていまして，そこから借りて読まなければいけないわけですが，学生時代には，そういうことの便宜は，あまりなかったのではないかと思います。助手になったら，そういうのが使えるようになりますけれども。大学院生になっても使えたでしょうね。だけど学部学生には，あまりそういう便宜はなかったのではないかと思います。

また，そのころの学生というのは，そういうものは自分がどこかで調達しなければいけないというような意識が，何となくあったような気がします。

日米の大学の相違

阿部　先生は1954年から58年までミシガン大学に在籍され，さらに1964年から65年にはペンシルベニア大学で教鞭をとられています。そうしたご経験から，日本とアメリカの大学の違いにつきまして印象に残っていることをお聞かせいただきたいのですが。

小泉　そのいきさつみたいなものをちょっと申し上げます。

私は1953年に卒業をしまして，すぐに助手にしていただいて，そこで勉強をしていました。すると，ＭＩＴ（マサチューセッツ工科大学）でPh.D.を取られた市村真一さんに，『ケインズ革命』を書いたノーベル経済学賞の（ローレンス・ロバート・）クライン先生から，研究助手，これはリサーチ・アシスタント（RA）というのですが，それを１人推薦してくれという依頼がありました。それで市村さんから森嶋先生に話があって，私が推薦を受けました。そのころクラインさんはミシガン大学におられたので，それで私はミシガン大学の研究助手になったということなんです。

この研究助手というのは，一応リサーチ・アシスタントで，研究は自分でするのですが，これは大学院生になる奨学金みたいなものなんです。そしてミシガン大学の大学院に行って，3年半勉強をして，Ph.D.を取って帰ってきました。

最初に行ってびっくりしたというか，非常に強烈な印象を持ったのは，向こうのキャンパスのアメニティというのは日本とは比較にならないこと。泥沼の道を歩いて木造校舎で教育を受けた人間ですから，アメリカの大学に行って，芝生がだあーっと広がっていて，きれいな建物が建っていて，そして芝生の上にcoed（女子学生）が転がって一緒に勉強をしている姿なんていうのは，本当にうらやましかったです。

そして3年半楽しく勉強をして，Ph.D.を取って帰ってきた。それは，いろんなことを感じて帰ってきているわけですが，全部申し上げるわけにいかないので。一番印象深かったことを言いますと，当時のアメリカの大学生，アメリカ社会と言いますか，それはいろんな違った価値観を吸収する力を持っていたように思います。ですから，アメリカ人の学生と一緒に勉強をしていても非常に楽しかったです。先生方も，私のような外国から来た人間に対して，いい指導をしてくれていたと思います。

そのことの関連で言いますと，先ほど言ったようにクラインさんが呼んでくれたのですが，そのときは1954年で，アメリカではマッカーシー旋風が吹き荒れた時代で，「クライン氏は共産党の集会に出たことがある」というようなことでマッカーシー委員会に呼ばれて，「おまえはコミュニストでないか」と言われたとのことです。それでクラインさんは嫌気がさして，私がアメリカに行ったときにはイギリスに行ってしまったんです。

ですから，私はクライン先生の指導は受けずに，ほかの先生の指導を受けた。むしろ（リチャード・）マスグレイブといって，木下先生と一緒に仕事をされるようになった財政学の権威の方々なんかと，私は親しく勉強をさせても

らいました。

阿部　ペンシルベニア大学についてはいかがでしょうか。

小泉　ああ，ペンシルベニア大学がありますね。ペンシルベニア大学のことを言うためには，そのころの阪大の社研（社会経済研究所）の動きというのを申し上げておかなければいけないのではないかと思います。

先ほども申しましたように，大阪大学の若い先生方は，輸入する経済学ではなしに，輸出する経済学をやらなければいけないということで，外国人との接触を非常に活発に進められていました。

そして，それで実績をあげてゆかれて，これは森嶋先生なんかが中心になってのことだと思いますが，大阪大学の経済学を支援するセンターをつくって，関経連（関西経済連合会）からずいぶんお金を出してもらって，外国の有名学者をたくさん招んだのです。ノーベル経済学賞のヒックス先生とかクライン先生などを，1年間というような長期間にわたって招聘しています。そのほか，たくさん有名な学者が短期間で来ておられまして，そのころの大阪大学というのは，日本の他の大学から見たら，本当にすごいなというような印象を持たれた経済学部，あるいは経済研究所だったと思います。

その一環としてクライン先生が1年間おられまして，日本経済のエコノメトリックスモデルをつくる研究活動をしまして，そのとき私も一緒に参画しました。そういうつながりで「いっぺんペンシルベニアに来いよ」ということで招んでいただいて，向こうで教鞭をとったということです。

向こうの大学に行って感心したことの一つは，やはり教授，助教授，あるいは准教授のような方が，すごくよく研究活動をされることですね。そして私も，担当講義のほかにリサーチ・プロジェクトを持たされて，それはそれはよく働くものだなと思いました。

そして，研究をたくさんするのですが，それでいながら，教育のほうは絶対に手は抜かない。手は抜けないということかと思いますけれども，教育の手を抜くことはできぬということで，私は自分の講義を持っていて，流感（流行性感冒）にかかって高熱を発したことがあるんですが，休講にすることは相成らんのです。休講にするのだったら，誰かほかの人を代講に立てろということを要求されました。私だったら，クライン先生に頼む以外にはないから，流感になって38度の熱が出ても，自分の家から大学までタクシーを走らせて講義をして帰りました。それぐらい教育の責任というのは重視していました。

そして，これはいま大阪大学でもしておられますか，授業評価を学生にさせること。

阿部　最近，やるようになりました。

小泉　これはアメリカでは常識でした。ですから手は抜けません。これは学生の授業評価があるから手が抜けないというのではなくて，学生が満足するような教育をしなければいけないということを真剣に考えさせるシステムがあると言ったらよいかと思います。

それから教えていて思ったことは，私は英語で講義をしていますと英語が下手なので，ずっと1時間（90分）話し続けていると，どこかでばててしまう。だから，どこか論理的につながらない部分をわざとつくるんです。そして講義していると，必ず学生が質問してくる。学生が，あなたはこう言ったけれども，そこは何でそうなるんですかということを丁寧な言葉で聞くんです。

いつも“Sir”が付きますけどね。ことにペンシルベニアというのはイーストで，アイビー・リーグ（Ivy League）ですから行儀がいい。学生でも行儀がよくて，質問するときはペラペラと話して“Sir”が付くんです。そして，論理的につながらない部分をつくっておくと必ず質問が出てくる。質問が出てきたら，そこで私は一

休みして，その説明をゆっくりとして続きをするということで，少し息をつくわけです。そのとおりになるんですね。

それで，私は日本の大学で同じことをしたんです。間違っていないけれども，ここのつながりは論理的にどうなるかという説明をきちんとせずに講義をすると，日本では，すうっと通っていく。そこのところがアメリカとどちらがいいのか。日本の賢い学生は，そこらへんは自分の頭のなかできちんと論理をつなげてやっているというふうに，好意的に解釈することもできるし，とにかく先生の言っていることを全部そのままうのみにして，それを再現するということなのか，よくわからないけれども，何かそこが違います。

これはミシガン大学で勉強したときに思っていたことですが，アメリカ人の学生と話していると，自分が腹の底からわかったと思うこと以外は記憶するつもりにならないんですね。だから，そこらへんは勉強する姿勢というものが違うのかなという気はしました。

経済学部長としての取り組み

阿部　先生は1979年7月から81年7月まで経済学部長を務められました。先生が学部長を退かれたあと1982年4月から大講座制への移行がございましたが，学部長として重点的に取り組まれた事柄についてお話しいただきたいと思います。あるいは，その前からの先生の阪大での教育者としての長いご活動を振り返られて，そのなかでのご記憶でも結構です。

小泉　学部長のときの話を少し申し上げましょう。

私が学部長になったのは，阪大のいろいろな学部のなかでも若い方だったと思います。そして経済学部で私のように若い者がなったから，こちらも若くしようと言って理学部が頑張られたんです。

とにかく，結構若くて学部長をさせていただいたのですけれども，そのときに私が考えたのは，自分が学部長になったら非常に強い経済学部にしようということです。どういう意味でかというと，優秀な人材を集める学部にしようと。

お断りしておきますが，ここで私が申しているのは，経済学部のうち私が所属していた経済理論・経済政策の分野のことです。経済学部には，このほか経済史，経営の分野があり，そのことを言わないのは，学部長をしていても，人事のことで手を出せるのは，せいぜい自分が所属している分野だけだからです。例えば，経済史の分野には宮本又次先生の輝かしい伝統がありますが，先ほど話しました経済学部設立当初の雰囲気などは，私の所属していた分野のことで，決して他の分野を軽視しているのではありませんので，そこのところは誤解のないようお願いしたいと思います。

私が申し上げているのは理論政策のことに限るので，そのことは一つよくご認識いただきたいと思うのですが，私が強い学部にしようと思ってできる範囲というのは，やはり理論政策系なんですよね。強いというのは人を集めるという意味でね。やはり経済学部にしろ，ほかの学部にしろ，その学部を強くしようと思ったら，研究者としていい人材を集めないといけないということだと思うんです。

例えば，アメリカのスタンフォード大学がありますが，そこに（ケネス・ジョセフ・）アローとか，その他有名な経済学者を集めたことがあります。そうすると，アメリカの社会でスタンフォードの経済学部の名前が，どんと上がるわけです。そして学生も，そこにどっと行くようになる。だから，ある大学をよくしようと思えば，よい研究者を集めないといけない。そう考えて，一段と頑張ってみようと思ったのです。

そのころ，すでに年配の方では，年配と言っては悪いですが，教授になっている方では立派な理論政策系の先生がたくさんおられました。

建元（正弘）さんとか，渡部（経彦）さんとか，前後しますけれども畠中（道雄）さん，新開（陽一）さん，安場（保吉）さんというような教授が揃っていたんです。若手のほうでも，そのときにはすでに何人かおられたけれども，さらに強くしようということを考えたわけです。自分に学部長が回ってきたら，自分の学部長の時代にすべきことはそういうことであろうと。優秀な若手の経済学者をたくさん集めようと考えたのです。

そのときにネックになるのはどういうことかというと，たくさん人数を採ろうと思ったら頭がつかえてしまう。旧講座制というのは教授１人，助教授１人。そして，私のころは停年退職をするのが63歳でしょう。教授になるのは遅い早いがありますけれども，四十何歳という程度ですね。早い人は40歳ちょっとでなるでしょう。もっと早いかもしれない，39歳なんていうのもあるかもしれない。数学とか理系は特に業績が上がるのは若いときですよね。若いときに，ばっと上がっていきますから，わりに早く教授になる。経済学も，わりに早く教授になる。理論系と歴史系などとは，またそこらへんは違うんです。

だけど，とにかく40歳そこそこで教授になると，63歳までといったら，20年ぐらいあるんです。そして助教授でいるのは30歳ぐらいから40歳ちょっとと十何年。それぐらいの年数の違いがある。そうすると，教授と助教授の席を全部埋めたらどうなるかというと，どこかでいい歳になっても教授になれない人が出てくるんです。

ところで，なぜ大講座制というのが出てきたかというと，昔の講座制の弊害を打破しようということで出てきたと言われているんです。いろんな大学でやっていることで，本当はどうだったかわからないけれども，最初は少なくともそうだった。

文学部などでは，旧講座制というのは，むしろいいというか，必要だというふうにも考えられていますね。例えば哲学で西田幾多郎のあとを継ぐというのは，西田幾多郎ががんがん育てて，自分の後継者として「これはいける」と思った人でないと。隣の講座の人が，とやかく言う問題ではないと，自分が育てて自信を持って後継者としていくというのがいいのだと。旧講座制のメリットがあるとすれば，そういうところだったんですよね。だけど，同時に弊害もあるんです。

とにかく，大講座制に移行するときに言われていたのは，旧講座制の弊害を打破するために大講座制にするということでした。けれども，阪大の経済学部の実情はどうであったかというと，もうすでに理論政策系の講座間で話し合いをして，どこかで人を採るというときには，一つの講座で決めるのはやめようとしていました。少なくとも３つの講座が寄って，この人なら採ろうというふうに決めようとしていたんです。

ですから，いわゆる旧講座制の弊害というのは，そもそもそんなに存在していなかった。しかし，何がネックだったかというと，先ほど言ったように四十何歳ぐらいで教授にしようと思ったら，どこかで頭打ちになって席が足りなくなる。それを変えないと，若い人をがんがん採ることはできないぞと私は思っていたんです。

それならどうしようと。たくさん若手の人を採りたい。そして，そのときに実際，どういう人を理論政策系で採っていたかというと，蝋山（昌一）さんは前から来ていました。それから猪木（武徳）さん。それから。

阿部　私の記憶では中谷（巌）先生，伴（金美）先生，東大に移られた神谷（和也）さん，林文夫さん，植田（和男）さん，井堀（利宏）さん。このあたりの方ではないですか。

小泉　そう。植田和男，井堀，林文夫。それに猪木，林敏彦，本間正明，蝋山昌一とか，そういうのが，わっと並んだ時期があったんです。

それは一橋大学に行っても，神戸大学に行っても「あんたのところはすごいのを集めたな」と言われました。それは本当に強力な布陣でした。

あれだけの人材を集めたら，どれをとっても早く教授にしなければならないような人たちばかりです。これは，いまの講座制のままで，教授１，助教授１のままにしておけない，大講座制にしなければいけないと考えたのです。大講座制をうまくデザインすれば，教授の数が助教授の数の２倍とまではゆかなくても，ずっと多くなるわけです。そうする以外にないと，私は学部長になったときに考えたのです。

その当時，阪大の総長は山村（雄一）さんでしたが，私は経済学部の大講座化の概算要求を大阪大学として全面的にバックアップして下さるよう山村総長にお願いしました。総長は「分かった。文部省の大学課長に言っておくから，なんとかするだろう。」と言ってくださって，文部省と協議した結果，私どもの要求は初年度で通りました。その頃の全国的な大講座化の動きの中では，ずいぶん早いほうでした。

こういう仕事をするのは結構大変でしたが，私にとっては，それまでの研究・教育とは全く異質な体験で，それなりにやり甲斐があったし，おもしろかったというのが正直なところです。

とにかく，少なくても私の頭の中では，優秀な人材を集めることと，大講座制への移行というのは，完全にセットになっていたのです。

長期計画委員会委員長として

阿部　いまお話に出た山村総長に関係しますが，先生は大阪大学長期計画委員会委員長を長年務められています。そこで先生が全学的に重点的に取り組まれた事柄，あるいはご苦労をなさったことについてお聞かせください。

小泉　確かに，これはご苦労なんですよ。長期計画委員会という名前はいいんですよね。長期計画というと，何か大学の長期計画を立てるみたいに聞こえるではないですか。だけど本当のところ，それは建物とか土地をどんなふうに使うかというだけで，大学の命みたいな研究には関係のない話ですよね。

そして，非常に悪く言えば，長期計画委員会というのは地割屋さんなんです。経済学部の建物を建てる場所はここですよと。それが一番重要だったというか，阪大には石橋キャンパスと吹田キャンパスがあって，どちらも結構新しいですよね。工学部は都島にあったのが移ってきたとか，理学部は中之島にあったのがここに来てとか，ほとんどが前のところから集まってきた学部ですから，その土地のどこにどの学部をつくるかということは，その学部にとって重大関心事なのです。少しでも自分の学部にとって，悪い言い方をすれば有利な条件のところに建てるようにする。そういう損得がらみがありますから，それはしようがないことです。

それは本来，アメリカなどであれば，大学のいわゆるプレジデントが決める。プレジデントというのは事務屋さんですからね。プレジデントと言っても，日本の大学の総長とはずいぶん違う。いまの法人になっても，一番上は総長ですが学者さんです。そういうのとは違って，研究や教育に実際にタッチする人間ではなく，どういう建物をどこに建てて，どれだけお金をかけて，授業料をどうしてというのを決めるセクションは別にあるわけです。

日本の大学というのは，それを分離せずに，教育にあたる人たちがやっていたわけです。それがずっと続いて，長期計画委員会というのは自分の土地をどこに持つかということを決めるような委員会になっていた。そういう意味で，非常にやりにくい委員会。だから総長も頼むときに，「これ，どうぞよろしゅう頼むぜ」ということで，丁寧に頼まれておりましたけれども，とにかくしようがないから引き受けました。

そのころ，ちょうど医学部の病院の移転が決

まって，医療技術短期大学部が３年制で，いまの博物館，あそこにいたのが吹田に行く。それをどこにするかが大変な問題だったわけです。それで苦労はしました。

だけど苦労をしているだけだったら，これはばからしいと私は思いました。私が思っていたのはどういうことかというと，美しいキャンパス造りにこの機会を利用しようということだったのです。本来，これは教育にあたる人間が直接にすることではないけれども，誰かがしなければならないとしたら，この委員会しかないと思ったのです。

私は，石橋からどろどろの道を歩いて，木造校舎で勉強してという経験をしており，25歳ぐらいのときにアメリカの大学に行って，あぜんとして，うらやましくてしようがなかったことは先ほど言いましたね。きれいな建物があり，芝生が青々としたところで，coedが寝転がって本を読んで一緒に勉強している。日本の大学生とアメリカの大学生というのは，すごく違うなと。アメリカの大学が全部が全部いいというわけではないけれども，日本の若い人たちも，こういう環境で勉強するようにならないといけないなと思いました。

そして長期計画委員会の委員長を引き受けたときに思ったことは，地割屋さんという嫌な仕事はしようがないからするけれども，この際，何かよいキャンパスづくりができるなら，それをしようと。研究者というのは，もともとはそんなきれいな環境はいらないんです。ぺんぺん草が生えていても研究ができたらいい。モルモットでも何でも，とにかく汚いところでもやっていたらいいので。それはそうなんです。しかし，入ってくる学生はそうではなくて，心が落ちついて清々するようなところで勉強する必要があると私は思っていました。

だから，いい環境をつくるというので，そのときの総長は熊谷（信昭）さんでしたが，総長に掛け合ったわけです。キャンパスの美化というか，そのときは「緑化」という名前を使ったと思いますけれども，予算をつくってほしいと言って予算をつくってもらいました。そして，その予算を豊中キャンパスと吹田キャンパスで，こういう割合で分けましょうと分けたんです。

そして何をしたかというと，ぼちぼち方々に使うのはやめて一点豪華主義でいこうということで，中山池のところから上がってきた，あの庭園（待兼山庭園）をつくったんです。あれは前はテニスコートだった。それは人それぞれで思うことが違うし，評価も違ってくると思うんですが，私は大学生が電車に揺られて石橋駅で降りて歩いてきて，確かに中山池のあたりの自然環境はいいのですが，上がってきてテニスコートがあったところに来たら，なんかガクッとくると。そして，やはり心が洗われるような門扉部分があって，そこを通って入ってきて勉学の場所に行く。そういうのが必要だということを何人かの方と話しました。

そのときに大久保昌一さんといって，前にここで話をされたと聞いていますあの人が，兵庫県にある社という町の庭園を造った話を聞いていたので，阪大でも素敵な庭園を造ろうと話し合って，あれを造ったのです。そのときには北山杉を見に行ったり，卒業生で松を寄付してくれる人なんかがいて，そしてできたのがあの庭園です。

私は，長期計画委員会の委員長を８年間もさせられて，させられた以上は，これはこうしておいたほうがいいと思うことをしておこうというので，あの庭園を造ったのです。

何事も毀誉褒貶はいろいろあるから，あれだって，あんなところにお金を使ってと思う人もいたかもしれない。だけど，一橋大学の人やいろんな大学の人が来て，「阪大はいいですね，あんなものが造れるんですか」と言った。私がそういうことをお膳立てしたなんて全然知らない人が，「あんなことをできるような大学はい

いですね」と言っておられたから，いいと思ってくれる人もいると思います。

そういうことを長期計画委員会のときにはしたんですよ。

菅　吹田のほうでは何か。

小泉　長期計画委員会は，吹田地区と豊中地区に分かれていまして，両方のヘッドというかたちで私が入っているだけで，積極的に吹田地区をどうするかということまで口出しはしていないんです。

ただ，緑化なんかはそうなんですけれども，医療技術短期大学部が４年制になって医学部保健学科ですか，それになったときに，それをどこに設置するかということは全体で決めないといけないから，私が乗り出していって交渉しなければいけなかったのです。

こんなことをあまり言ってはなんですけれども，やはり薬学部は俺の隣に持ってくるなよと言うし，医学部は俺のところは何とかとか，そういうエゴは結構あったから，その調整役はしました。それ以外は，積極的に緑化というのはしていないけれども，正門をつくるのは熊谷総長と一緒にしました。吹田キャンパスのなかに。あれは立派な寄付をもらって，できたんですよね。吹田についてしたのは，それぐらいです。

教育研究への取り組み

阿部　阪大での教育・研究について回顧されて，重点的に取り組まれた事柄が，いままでのお話以外のことで何かございますか。

小泉　研究ということを申し上げますと，先ほども申しましたように，私が経済学の勉強を始めた時期は，経済学の動きのなかで，アダム・スミスから始まって，マーシャル，ピグー，そしてケインズときた時期です。

そのケインズが出てきて，経済学についての考え方がどういうふうに変わったかというと，市場だけに任せておいたのでは経済はおかしなことになる。けれども，政府が財政政策などの政策を適切に行えば，経済をうまくコントロールすることができるという考え方が出てきた時代なんです。それは，その後いろんな批判が出てきて変わっていきますけれども，そういう時代でした。

だから，誰でも知っている乗数理論の話をしますと，乗数がどれぐらいの大きさで，政府支出をこれだけ増やしたらＧＮＰがどれだけ増えるとか，そういう考え方。それをもっと複雑化したようなかたちでいえば，政府がこういう政策を打ったら，経済をこういうふうに動かすことができるというような考え方が出てきた時代なんです。

そして，その延長線上で考えたら，市場経済というのは，ある一つの計量化されたモデルで捉えることができる。そのモデルを使って予測することもできる。そういう予測ができるんだったら，こういうかたちで政府の政策を行えば，不況になるところを不況にせずに持っていくことができると。そういう政策手段を使って経済をコントロールすることができるというような考え方が出てきた時代だったわけです。それが，後でそんなに簡単なことではないなという議論が出てくるわけですけれども。

そして，そういうふうに考えて組み上げられてきたのが，計量経済学モデルなんです。私が経済学の勉強を本格的に始めたころは，そのような潮流のなかで経済学が動いていた時代でした。計量経済モデルを使って予測する，政策の効果を確かめる，そういう仕事をクライン先生はしていたのですが，私も日本経済についての同じような研究に一時期熱心に取り組んでいました。

他方，マクロ経済学については，当初から，その理論的基礎を理論的，実証的に検討する研究分野がありまして，ときの経過とともに，経済をメカニカルにとらえる計量モデル的アプ

ローチに再検討を迫る，市場の動きに焦点を合わせる研究が盛んになってきまして，私も研究の軸足をそちらの方に向け変えてきました。

教育ということでは，それは一生懸命に教育したということで，特にどうこうと申し上げるのは適当であるとは思いません。ただ，私が自分でそういうふうに見ていても，そのとおりだというように教え子に思ってもらえるかどうかは別ですけれども，教育を一生懸命にしないといけないという思いは非常に強いほうだったと思います。大学紛争がありまして，大学封鎖とかひどいことをして，いろんな問題が出てきておりましたけれども，やはりそのときに思ったのは，大学の教員といえども，研究者であると同時に教育者なので，もっと教育をきちんとしないといけないということで，いまでも私はそう考えています。

実は森嶋先生が，ちょうど大学紛争の真っただ中だったそのころに，社研を辞めてロンドン大学に行くと決意された時期があったんですが，そのときに一緒に行かないかと言われました。しかし，日本の大学での教育がこうだというような話をしたら，「そうか，そんならあんたは日本の大学にいなさい」と言われて，私は大学に残ったといういきさつがあるんです。

私は，いま80歳ですけれども，振り返ってみると，研究ということもあるけれども，いまだに教え子がよく集まって会を開いてくれたりしていて，大学の仕事のなかで教育というのは，それなりにしてきたのかなという気はしているんです。

阪大生へのメッセージ

阿部　最後に，現在の阪大生にひと言お言葉をいただければ幸いです。

小泉　そうですね，何を言っていいかわからないけれども，私が経済学を勉強してきたころと，いまの時代を比べると，なにか経済学を勉強するときの心構えというものが違ってしかるべきではないかなという気はしますね。

私が経済学を勉強した時代というのは，日本で言えば固定相場制で，官僚組織レベルでは護送船団方式みたいなものがあって，そして企業レベルでは日本的経営というか，そういうものがあった。われわれは，そういうものをいつも意識して，経済学を勉強していたわけではないけれども，そういう枠組みのなかで日本の経済というのは，それなりに捉えることができた。高度成長期というのは，そういうことが基礎にある時代ですよね。

ですから，そのときの経済の勉強の仕方というのは，それなりにわかっているというか，こういうかたちで勉強して，モデルをつくって，日本の経済を活性化しようと思ったらこういう政策をしたらいいとか，そういう議論ができたんです。それが変動相場制になって，さらにプラザ合意なんかがあって，円高がわあっと進み，それを受けてバブルになって，バブルが崩壊して，その間によく言われる経済のグローバル化が出てきました。

その結果として，グローバル化した世界経済を参照軸にして，日本経済の動きを考えるようになってきています。これをアメリカのネオコン的にとらえるか否かは別として，これだけ経済活動がグローバル化していたら，過去の護送船団方式など使えないのは明らかで，わが国では，規制緩和などの制度改革によって，このグローバル化の波に乗る方向でそれに対応する考え方が支配的であったと思います。しかし，「本当にそれでよいのか」と反省を迫られているのが現状でしょう。

それなら何を求められているかというと，そういう動きのなかで国のかたちというものを考えていかなくてはいけないということかと思います。国のかたちというのは，スウェーデン型とかアメリカ型とか，そういう言い方をする人もいますけれども，そんな単純なことではなく

て，日本の国のかたちをどういうふうにするかという視点なしに，国の経済活動は営むことができないんだというふうになってきているんだろうと思うんです。

ですから，いまから経済学を勉強する人には，そういう視点に立ってほしい。日常仕事をするうえで，いちいちそんなことを考えることができるわけではないけれども，経済学というのは，ある意味ではエコノミック・リテラシーを高めるための学問で，エコノミック・リテラシーの高い国民は，それだけ優秀な社会を築くことができる国民だと言われているように，いい意味のエコノミック・リテラシーを持たないといけないと思うのです。そういうことがますます重要になってきているのが，いまの時代だと私は思っているんです。

そのように国のかたちをどういうふうにもっていくのか，そのために経済をどうするかというのは，経済の知識を充分に持っていなかったら答えが出てこない。だから，いまから経済学を勉強する人たちには，そういうかたちで勉強してもらえたらいいのではないかなというふうに私は思っております。

小泉進名誉教授略歴

1929年8月	神戸市に生まれる
1949年3月	灘高等学校卒業
1953年3月	大阪大学法経学部卒業
1953年4月	大阪大学法経学部助手
1954年9月	米国・ミシガン大学より研究助手のポストの提供を受け大学院に入学（1958年4月まで在学）
1958年6月	米国・ミシガン大学よりドクター・オブ・フィロソフィーの学位を授与せらる
1958年8月	大阪大学経済学部講師
1960年3月	大阪大学経済学部助教授
1964年8月	米国・ペンシルベニア大学ワートン・スクール客員准教授（1965年8月まで）
1969年4月	大阪大学経済学部教授
1969年8月	大阪大学評議員（1970年3月まで）
1975年8月	大阪大学評議員（1977年7月まで）
1979年7月	大阪大学経済学部長（1981年7月まで）
1983年8月	大阪大学評議員（1985年7月まで）
1993年3月	大阪大学停年退職
現在	大阪大学名誉教授，帝塚山大学名誉教授

Memoir of Osaka University talked by Professor Emeritus Susumu Koizumi

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Professor Emeritus Susumu Koizumi related to the history of the Faculty of Economics at the Osaka University. Professor Koizumi, who was born in 1929, entered the newly established Faculty of Law and Letters at Osaka University in 1949, and graduated from the newer Faculty of Law and Economics in 1953. In both faculties Professor Koizumi studied economics very hard. Professor Morishima evaluated his academic ability very much and let him come to be Assistant Professor in the Faculty of Law and Economics. During the position Professor Koizumi studied at the University of Michigan as a graduate student, and won the Ph.D degree in 1958. Thereafter, in the Faculty of Economics Professor Koizumi was promoted to Lecturer, later to Associate Professor, and finally became Professor in 1969. In the period from 1979 till 1981 he became Dean, made great efforts to invite many young and excellent scholars as the staff members, and succeeded in it. In addition, Professor Koizumi very much contributed to arranging the circumstances of the Toyonaka campus for the students as a member of the Committee of Long Term Campus Planning. He became Professor Emeritus in 1993, and later worked as President of the Tezukayama University.